感謝と主体性

昨日、職員会を行いました。年明けから六期に入りますので、その期に大切にしたいことを職員で確認し合いました。六期のテーマは「誇りと感謝」。今年度の締めくくりの期です。最後は「誇りと感謝」で締めくくりたい、それが理想です。

難しいテーマだと思いました。この一年間積み上げてきたものが実際にあれば、誇りは十分抱くことができるでしょう。しかし、感謝については、一人一人の思いや判断に委ねられる分、それを抱けるとは限りません。「感謝しよう」と周りが言っても、「私は感謝はできない」という人が、残念ですが必ずいると私は思います。

感謝できないという人は、恐らくよい思いをしなかった人たちでしょう。中学生に限りません。大人だって同じです。そこに所属したことで、大変な目に遭ったり嫌な思いをしたりして、自分には何もメリットがなかったように思えれば、感謝という思いは生まれてこないはずです。そういう人に「感謝しよう」と言ってみたところで、本当の感謝の思いは生まれてこないのではないでしょうか。

しかし、そういう人にも感謝の思いが生まれる時があります。それは、よい過去も、そうでない過去も、自分にとってはかけがえのないものだと自覚できた時です。何だか抽象的になってしまいましたね。具体的に話しましょう。

当然のことですが、中学時代というのは一生に一度しか経験しません。それをどんな仲間や教師と、どのように過ごしたかは、泣いても笑っても変えることができない事実です。試合で一回戦負けだったとしても、勉強の成果が芳しくなかったとしても、はたまた、仲間とトラブったとしても、それが自分の最初で最後の中学時代なのだと自覚できれば、その時に関わってくれた人たちや学校が尊い存在となるはずです。

これはある程度、年齢を重ねないとわからないことかもしれませんね。若い時は、その時その時の感情が優先してしまうでしょうから。旧三校が閉校するときに、多くの方が名残惜しみました。閉校のために労を惜しまず、必死に取り組みました。それは、母校に感謝の思いがあったからだと私は思います。

感謝の思いが、人の主体性を最も引き出します。感謝の思いがあれば、人に言われなくても、自分の判断で礼を言ったり行動で表したりするものです。「礼を言わなければ(礼をしなければ)気が済まない」という人もたまにいますよね。それは、まさにその人の主体性そのものです。

感謝は人の心が決めるものです。「第六期は『誇りと感謝』がテーマだから」という他律的な判断ではなく、自分が感謝したいかどうかをしっかり考え、自分の意思で判断しましょう。感謝の思いがないのに感謝するふりをすると、人を傷つけたり不快にさせたりする結果が生まれてしまいますからね。

(十二月二十一日 記)